

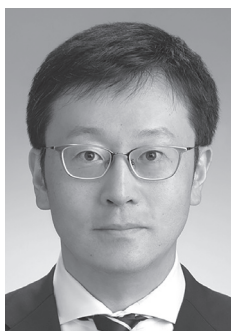
緑内障と転倒や転倒恐怖感

Glaucoma, Fall, and Fear of Falling

結城 賢弥（慶應義塾大学医学部眼科学教室）

緑内障は網膜神経節細胞死に伴い神経線維の走行に一致した視野欠損が生じる疾患である。緑内障は通常慢性の進行を示し、10年、20年、30年という年月をかけて周辺の視野が欠損し、徐々に中心の視野を喪失、視力を喪失し失明に至る場合がある。2019年 Morizane らはわが国における新規視覚障害者12,505名の原因疾患を検討した。その結果、緑内障は視覚障害の原因の28.6%を占め、失明原因の第1位であった（Morizane et al. JJO 2019）。日本緑内障学会が岐阜県多治見市で行った疫学調査の結果では40歳以上の緑内障有病率は約5%であり、特に70歳以上の緑内障有病率は10%と高く高齢化社会においては緑内障に罹患しながら生活する高齢者が多数いると考えられた。

両眼を閉じて安全に歩行することができないのは容易に体験可能であり、視機能が安全な歩行に重要なことは自明である。われわれのグループは365名の緑内障患者を対象に転倒によるけがのリスク要因を構造方程式モデリングの手法を用いて検討した。その結果、下方の視野障害と転倒によるけがが関係したと報告した。また387名の緑内障患者と293名の視野正常な対照群から質問表を用いて転倒恐怖感を聴取し、緑内障重症度と転倒恐怖感の関係を解析した。その結果、後期緑内障患者では視野正常者と比較し、約4倍程度転倒恐怖感を有していることが明らかになった。さらに392名の緑内障患者を前向きに追跡に転倒恐怖感発症のリスク要因を検討した。その結果、下方周辺視野障害を有する患者が転倒恐怖感発症のリスクが高かった。同様に273名の緑内障患者の転倒恐怖感をfall efficacy scale internationalを用いて検討し、緑内障患者における転倒恐怖感 は下方周辺視野障害が重だけでなく、下方中心視野障害が軽い患者により強いということを明らかにした。これらの結果から下方視野障害を有する緑内障患者は転倒や転倒恐怖感リスクが上昇していると考えられた。



略歴

平成13（2001）年 慶應義塾大学医学部 卒業
平成13（2001）年 慶應義塾大学医学部眼科学教室
平成14（2002）年 足利赤十字病院眼科
平成15（2003）年 独立行政法人国立病院機構栃木病院眼科
平成16（2004）年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 助教
平成20（2008）年 慶應義塾大学医学部大学院博士課程 入学
平成25（2013）年 ハーバード大学ボストン小児病院 留学
平成27（2015）年 慶應義塾大学医学部眼科学教室 専任講師
現在に至る